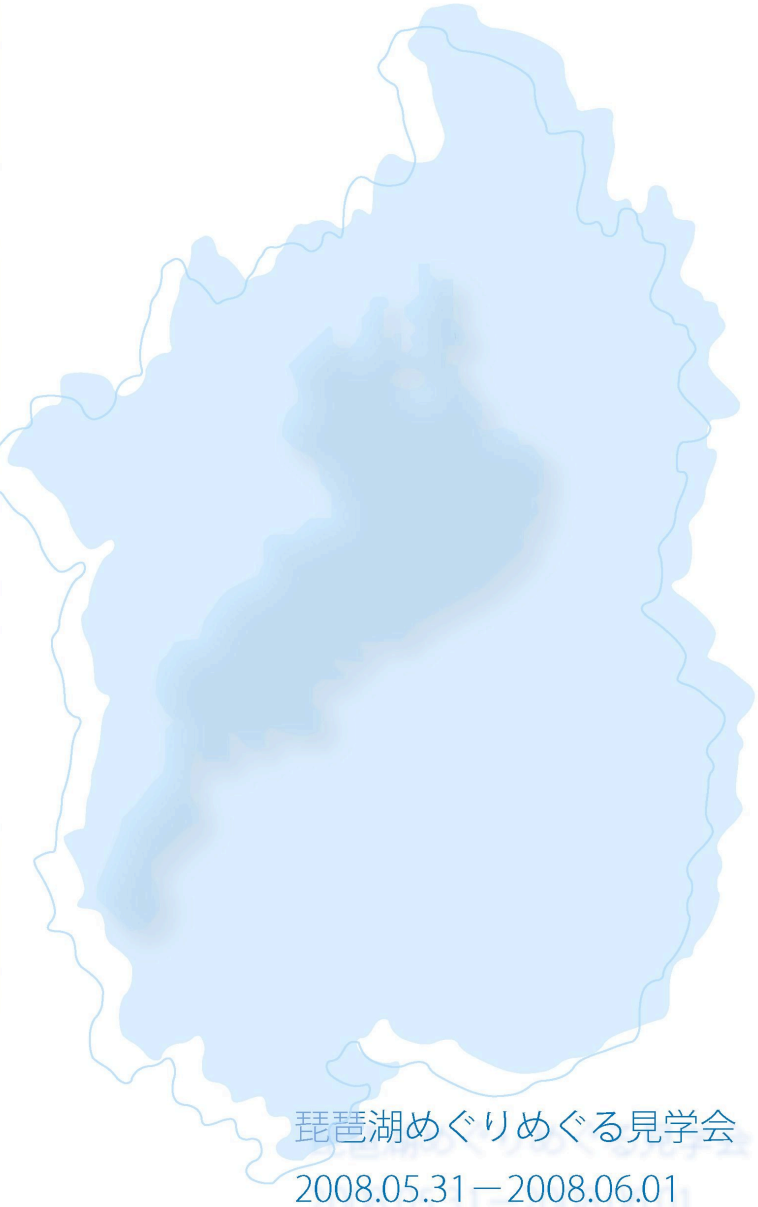

琵琶湖めぐりめぐる見学会

2008.05.31－2008.06.01

活動報告書

GROUNDSCAPE DESIGN youth

1. 企画情報

■企画名：『琵琶湖めぐりめぐる見学会－複合的な街を巡り人の生活と水を学ぶ－』

■開催日時：2008 年 5 月31日～2008 年 6 月 1 日

■開催場所：滋賀県　（高島市マキノ町海津（重要文化的景観選定地区）／高島市新旭町針江／
近江八幡市（重要文化的景観選定地区・重要伝統的建造物群保存地区））

■参加人数：１３名（関東１０名、中部１名、関西２名）

■講師

濱崎一志　教授　（滋賀県立大学　人間文化学部　地域文化学科）

奈良俊哉　氏　（近江八幡市　協同政策部　地域文化課　文化財専門委員）

石川慎治　助教　（滋賀県立大学　人間文化学部　地域文化学科）

■企画運営者

永山悟　（東京大学大学院　社会基盤学専攻　景観研究室）

灘本知香　（株式会社　水原建築設計事務所）

江渡香莉　（立命館大学大学院　理工学研究科　創造理工学専攻　建築設計デザイン研究室）

■企画趣旨

滋賀県は、日本において最大面積の湖を持ち、「交通の結節点」「城下町」「水の利用」から発展してきた県です。この３つの要素は、現在まで互いに影響し合いながら滋賀県の街、歴史・文化・人間の生活を形成し、同時に滋賀県独自の景観を作ってきました。しかし、現在、琵琶湖の水系や景観は崩れているものも多く存在します。そこで、琵琶湖湖岸を１周することで、その土地に培われてきた景観の特性を見学し、保存活動がなされている町から現状や問題点を学ぶことを目的とします。

■企画内容

「水と人の生活を基軸に、景観が動的に残される場所を訪れる。」

□高島市

マキノ町海津

「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」として2007年に滋賀県で２番目に重要文化的景観に選定された地区です。琵琶湖をはじめとする河川や内湖のほか、湖岸の石積みや共同井戸、知内川で続けられている伝統的なヤナ漁など、多様な水文化が現在も存在している町です。海津・西浜の湖岸に約 1.2km にわたって続く、高さ2.5m前後の江戸時代中期には完成していたとされる石積みの景観は今もその形を残しています。産業が変化する中で保存される石積みや町の景観を見学しました。

新旭町針江

２００４年１月ＮＨＫハイビジョンスペシャル番組、映像詩『里山・命巡る水辺』により針江地区が紹介され、知名度が上がり現在では世界から来訪者が途切れない町です。
昔から鉄管を20ｍ打ち込むと綺麗な地下水が湧き出す地区。「生水の郷（しょうずのさと）」と呼ばれ、昔から大切に町の人に利用されてきた川端（かばた）と呼ばれる水のシステムが現存しています。また、川端によって水を大切に扱い川上の人を信頼し川下の人を思いやり住民の信頼関係が強く育まれてきた土地です。住民によって守られてきた現存する水のシステムを見学しました。

□近江八幡市

近江八幡市の風景への取り組みは、昭和４０年代の青年会議所による八幡掘の修景保存運動からはじまりました。その後、西の湖周辺の水郷地帯の保存、在郷町（旧八幡町）の重要伝統的建造物群の選定、河川改修事業の景観への配慮などの取り組みが行われてきました。「第３次近江八幡市総合発展計画（平成１３年３月）」において、自然環境保全の推進、歴史的まちなみの保全と育成が掲げられ、平成１５年度から風景づくりの取り組みをスタートし、平成１６年に「景観法」が制定され、全国規模で良好な景観の形成を目指している市です。住民と市によって景観の保存運動が起こり、現在も活発に景観の保全へ取り組む近江八幡市の現状を見学しました。

重要文化的景観選定地区（ヨシ地／円山水郷めぐり）

琵琶湖のほとりでは、古くから屋根の材料となる葦の産業が栄えてきたことから、現在も内湖には沢山の葦が生息し、生態系のある美しい景観を形成しています。しかしながら、現在、葦の産業は衰退したため需要は減り、葦は育ち、増える一方。葦の産業が衰退し湖の景観を台無しにしてしまう現状から観光船の行きかう観光への産業へシフトしている場を見学しました。

重伝建保存地区（新町通り／旧伴家住宅・旧西川家住宅・郷土資料館）

国の重要伝統的建造物群保存地区として保存されている町です。江戸時代末期から明治にかけて建築された商家が整然と残る町並みは、近江商人のふるさととして、その保存運動が展開されています。八幡商人は、近江商人の中でも最も早い時期に活動し、海外進出も果たしています。江戸出店も最も早く、八幡商人が活躍しています。新町界隈には、八幡商人の住居がまとまってよく残っており、景観だけではなく、史跡としても重要なものとして残されている重伝建地区を見学しました。

■企画当日の行程

□１日目：高島のまちと湖西を巡る旅

１０：００　JR米原駅　集合

１０：３０　JR米原駅　出発

１１：３０　奥琵琶湖パークウェイ　昼食

１３：００　高島市　見学

・マキノ町海津

重要文化的景観選定地区　海津大崎を散策しながら石川助教にお話を伺う

・新旭町針江

「針江生水の郷」見学　針江生水の郷委員会の方にお話を伺う

針江大川・川端道・中島自然地・正伝寺等を見学

１６：３０　琵琶湖　湖西側ドライブ

（白鬚神社・雄松崎の白汀（琵琶湖八景））

１９：００　宿院　到着

１９：３０　夕食

２２：３０　勉強会

００：００　懇親会

□２日目：近江八幡の水郷地帯と湖東を巡る旅

０７：００　朝食

出発までの間、周辺を散策

０９：００　近江八幡市　重要文化的景観選定地区（円山村）水郷めぐり

１１：００　兵四楼邸にて濱崎教授から重要文化的景観及び八幡堀に関する講演、勉強会から出た疑問についてお話を伺う

１２：３０　昼食

１３：１５　宿院　出発

１３：４５　旧伴家住宅にて奈良氏から近江八幡市の活動についてお話を伺う

１４：４５　近江八幡市見学

重要伝統的建造物群保存地区（旧伴家住宅・旧西川家住宅・郷土資料館・新町通り）見学

１６：００　近江八幡市を自由散策

１７：００　大阪・京都方面の参加者と別れ、一旦解散

琵琶湖　湖東側ドライブ

１９：００　JR米原駅　解散

■企画当日の経路

余呉
木之本IC
永原
マキノ町海津
「海津大崎の岩礁」
メタセコイヤ並木
マキノ
奥琵琶湖パークウェイ
高月
長浜
新旭町針江
新旭
米原IC
米原
彦根
近江高島
白髭神社
近江舞子
「雄松崎の白江」
湖東三山
西明寺
金剛輪寺
百済寺
永源寺
宿院妙覚院
近江八幡水郷地帯
八日市IC
和爾
琵琶湖大橋
堅田
「堅田の落雁」
佐川美術館
近江八幡
比叡山坂本
守山
大津港・なぎさ公園
草津
近江大橋
大津
石山
瀬田
草津田上IC
（瀬田・石川の清流）
MIHOMUSEUM
当日の行程　を示す
予定行程　を示す

■参加者の参加希望理由

・　楽しそうだったから。

・　旅に出たかったから。

・　先輩に進められたから。

・　水辺というキーワードにひかれて。

・　見学内容とメンバーに惹かれました。

・　滋賀に行ったことがなかったのと、ＧＳのメンバーとの議論や交流の機会として行きたかったです。

・　琵琶湖に行ったことがなかったこと、近江八幡のまちづくりに関心があったこと、そしてなによりもGSのメンバーで行ったら絶対楽しくなるだろう、ということが理由です。

・　GSDW 後に youth の活動に参加していなかったことを残念に思っており、比較的近くでの開催だったので参加しました。土地勘が少しあり、また、知らない場所にもいけるところに興味を持ちました。

・　個人旅行や友達同士の旅行では味わえないような体験（講師の方々や地域の方の話が聞ける、ユースのメンバーと実際のまちを前に議論できる）ができると思ったからです。

■参加者からの感想

□伊藤啓介
雨と男ばかりの車。決して最良とは言えないコンディションで始まった旅でしたが、マキノと針江の集落を歩く頃にはそんなこと一向に気にしていない。初めて見るものをできるだけ目に焼き付けようと、又有り難い解説を聞き漏らすまいと、ただそのことに必死になっておりました。
旅には何の予備知識も持たずに出かけ、行き当たりばったりで得体の知れない何かを吸収するタイプもあり、それはそれでいいものです。今回は専門にやられている先生に解説していただき、集落の構造の大枠をあの短時間で勉強できました。2日目の近江八幡もこの機会でなければ入ることのできない屋根裏や部屋じゃないような場所にも踏み込ませて頂き、建物の読み方まで教えて頂き非常に面白かったです。残っているものには残っているだけの理由があり、そこから学べることは多いことを実感しました。そして夜は、一人では考えもしない議題で議論をする相手がいる。それが大勢での旅のいいところですね。次は1人旅或いは少人数でこの場所に行くこともあると思いますが、そのときは今回の知識を道具により深い体験ができる予感がします。ありがとうございました。それにしてもあの車割りは……

□栗原裕也
湧水を活かした川端が生活の一部となり、清流にしか育たない梅花藻がそよそよゆらぐ。きれいな〝水〟との関わり合いを肌で感じることのできた今回の企画。
ただ、〝水〟以上に、仰向けになって夜空を眺めた時の感動は強く印象に残っている。
あんなに煌々と輝く星空に惹かれたのは私だけだろうか。
そもそも最近は夜空を意識して眺めるなんてめったにない。見上げたとしても視界は何かしらに遮られ、澄んでいるとはお世辞にも言えない。そんな夜空が〝当たり前〟と思ってしまっていた（夜空に対して何か感じとろうとすることをやめていた）僕にとって、あの夜の満天の星はハッとさせられた。常日頃目にしながらも気にしていない景色を、違う場面で美しく感じた。ということは、景色から何か感じようとする姿勢が少し足りないのではないか。自問自答し、学ぶものとしての意識を改めるいい機会になった。そして、なんといっても〝楽しい〟見学会だった。皆様お疲れ様でした。

□吉田正哉
琵琶湖の周りを一周りするなんていう機会は、このような企画がなければ一生することがなかったと思うので、企画者の皆様には非常に感謝しています。
初日はあいにくの雨天、曇天でしたが、それはそれで琵琶湖周辺の風情を楽しめたかなと感じています。また、石川さんのガイドもあって、集落巡りは非常に明快でわかりやすくてよかったです。
宿も、目の前に琵琶湖が望める立地で、人もいなく、東京では見られないような光景がいろいろと見られました。星が見えたりとか、琵琶湖の対岸が見えたりとか。何より、人がいないから、東京とは比べ物にならないくらい静かだったりとか。
水が流れる音をあんなに心地よく聞いたのは本当に久し振りでした。
二日目は天候にも恵まれ、心地よい陽気の中、水郷めぐりを楽しむことができました。昼からの近江八幡めぐりは、近江八幡市の景観に関する考え方や、それを利用した町おこしのあり方などの話があり非常に関心が持てるテーマだったと思います。また、市がやっていることの裏側も見れた気がするので、それはとてもよかったと感じています。
最後になりますが、2日間本当にのんびりとした時間を楽しく過ごすことができました。本当に感謝です。ありがとうございました。

□福角朋香
GSデザインユース見学会四回目となる滋賀ツアー。私も今回で三回目の参加となりました。ユースの見学会で行く旅行は、学生同士の交流はもちろん、その土地の専門家からの説明が豊富で普段見ることができない場所を見学でき、そこでの詳しいお話を聞くことができて毎回とても満足しています。
滋賀県は実家と出身大学が三重・福井と両者とも隣の県であった私にとっては身近な存在でした。しかし、滋賀県の魅力をほとんど知らなかった私にとって、今回の旅行で滋賀県の魅力が格段に上昇したことは言うまでもありません。具体的に述べますと、海津の町並み、針江の町おこしなど「琵琶湖と暮らすまち」というキーワードが節々に現れていて、土地と生活－自然と人間の関係が見学している私にたくさん伝わってきました。
まちづくりだけではなく、ドライブ中の琵琶湖の様々な表情や西湖での船乗りでは琵琶湖の自然を満喫することができました。
今回の旅行で経験したこと、感じたことを自分の暮らすまちに置き換えてみると、また新たな発見があると思うので、旅行が終わってもそこからから学んだことをこれからも活かしていきたいと思います。最後に、今回の旅行でたくさんの説明をしていただいた講師の方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

□河原誠
滋賀。日本一大きな湖がある県だと、知識では知っていたのですが行くのは今回が初めてでした。
で、実際に見た感想はでっかい。これは海なんじゃねーか？という疑惑がどうしても頭から離れず、ついつい水を掬ってしょっぱくないことを確認してしまいました。いま、酒をちびちびやりながら今回の旅を振り返ってみると浮かんでくるのはマキノ海津大崎の風景です。力強い石垣の上にこんもりと盛り上がった木々、そしてそれに寄り添う様にして静かに建つ家々。長い時を経て積み重ねられてきた人々の営みが、こんなにも素直にでている町並みを僕は初めて目にしました。しかもそれが驚くほど美しい。
これから都市について悩んだとき、あの風景は大切な事を僕に教えてくれるような、そんな気がしています。とても有意義な旅でした。今回の素敵な旅を企画してくださったスタッフの皆様、諸先生方、本当にありがとうございました。

□棚橋玄
今回の見学会は滋賀という場所について何も知らないまま、本当に予備知識のない中での参加でした感想としてはまず「訪れてみなければわからないことが沢山ある」ということでした。
琵琶湖を抱くように街があり、それに寄り添うように生活がある。「水」という存在が当たり前に、そしてとても大切なものとしてそこにある。その空気感は実際に体験して初めて感じることの出来るものだったと思います。
地方の中小都市のあり方というのは現在の日本が抱える大きな問題の一つであると思いますが、今回感じたのは凄惨な現状というよりもむしろ可能性のほうでした。必ずしも発展・拡大していくことを目指すのではなく、残されたものを守り続けること、むしろ積極的に「今のままで良い」と言えるということ。そういった価値観の可能性をぼんやりと、そして強く感じるきっかけになったと思います

□手島史惠
目を閉じると、そこには舟にゆられめぐった水郷の景色。旅が終わっても、まだまだその感覚がよみがえるように余韻が残っています。
当日の朝は、小雨。なんとなく憂鬱な心持ちでの出発でした。しかし、琵琶湖が見えるとそんな気分も一掃、深緑の木々のトンネルや道路から今にも手の届きそうな湖の水面、幻想的な琵琶湖の景色が広がり、一気に旅気分になりました。あの裸足で湖岸を走っていた少年のおかげもあったかもしれませんが。（笑）
そしてなんといっても、宿院に到着したときのみんなの笑顔が、とても輝いていました。近江牛のしゃぶしゃぶ（最高！）、飲みながらの勉強会。みんな時をわすれて議論が白熱していました。それこそ、ＧＳＤｙの見学会の醍醐味ですよね。。。
今回の旅では特に、景観は人々の暮らしから出来たものであるということをつくづく感じました。勉強会でも、その日のマキノ海津地区や針江地区での見学をもとに、ハードとソフトの関係、その価値をどう捕らえて更新していくのか、といったことなどを議論しました。また、行政や民間、研究者の関係などの様々な話を聞いたことでも、次の日の近江八幡の見学へとも繋げる有意義な話し合いができたように思います。
また、地方での見学会、これは良くも悪くもＧＳＤｙの色が出るものであり、その後のＧＳＤｙの活動を引っ張っていくものだと思っています。反省としては、せっかくの「自立性の人たちの集まり」であるという前提をもとにした見学会でありながら、各個人が強いものとして自ら企画に参加して見学会をつくっていく、というものとしてはあまり発展しなかったように感じました。それは各個人が反省すべきことでもあると思います。
しかし、違う分野、違う境遇、違う価値観の人と話し合いができたこと、これは刺激にもなると同時に自分の考えを見つけたり、見直したりすることにもつながり、本当に経験してよかったと思いました。旅だからこそ、ＧＳＤｙだからこそ、このメンバーだからこそできたこと。この旅に参加できたことを誇りに思います。

丸橋温美
関西に住んでいて、“近いから行ってみようか”くらいのつもりで参加したツアーでしたが、初めて訪れる場所も多く、琵琶湖と周囲に広がる美しい風景を堪能した２日間となりました。また風景だけではなく、そこに暮らす方々に触れることで、地域の持つ魅力に近づくことができる貴重な経験となりました。
中でも私の印象に残っているのが、針江の川端です。地元のガイドの方に案内していただいたことで、観光地化して土地の生活が壊されてしまわないたくない、でも美しい水源や川端を知ってもらいたいという気持ちが伝わってきました。また、案内料をとって、それに責任を持って来訪者を楽しませるということが、長続きさせるコツなのかな、とも感じました。単なるボランティアだと、モチベーションに左右されたり、どこか馴れ合いにしまったりする可能性があると思います。針江では川端の鯉や家の中の調度品、「○○さんの川端」という案内表示など、見るものすべてが、地域の生活のストーリーを示すようにデザインされていてすばらしいと思いました。
この見学会を企画してくださったスタッフの方、また、講師の方には大変感謝しております。また、一緒に行ったメンバーで、お酒を飲みながら勉強会をしたことは忘れません。このような経験ができた見学会に参加できて、本当によかったと思います。

□平田有紀
今回の旅を通して、風景が暮らしの表象であることを改めて実感した。
例えば一日目に行った針江地区での川端や、マキノの船入場、近江八幡の葦津に商人屋敷街‥。落ち着いた安心感のようなものを感じた風景には、そこに暮らす生活感が確かに垣間見れるところだった針江地区では湧水と共に暮らす生活。生活用水としても多様に利用される湧水とその水辺を保つため、地域住民主体での環境整備が行われていた。水辺の管理というささやかな活動ながら、その穏やかな生活感をみて、とても魅力的に感じた。ここでは清水と触れ合う暮らしを築くことには精力的だが、それ以外の、例えば住宅の景観整備等にはあまり関心がないようだった。伝統といわれる川端の保存に執着しないことにも表れるとおり、あくまで現在の自分達の生活に適応した暮らしを築くということに徹しているのだろう。
清水との距離を保つというシンプルな共通価値があり、それが固定した形ではなく住民の生活様式にあわせた活用をするための環境整備、というのが純粋な文化継承の姿ではないかと感じた。
小さな針江地区での風景が洗練されて見えたのは、簡潔な共通財産としての水辺が、地域の暮らしに根付いて生きていたからだろうか。見えとしての風景の要素は、私が思っていたよりも単純なものなのかもしれない。
一方、近江八幡市に残る西の湖の縮小と葦津の荒廃という現状。
現在湖では釣りや船での観光利用はあるものの、漁業は縮小し周辺集落の過疎化も進行、葦の需要も減少する一方のようだ。葦津を掻き分けて進む船旅や、一面の葦の風景が観光や映画の舞台としての産業としての要素となっているが、実際にはこの地の生活で利用されている風景ではなくなりつつある。里山と同じく、葦津においても人の手による管理がないと私たちが近づいて楽しむことのできるものではなくなってしまうだろう。自然風景地は特に、人との関わり方でどうにも変化しやすい、より繊細なものなのかと感じた。
これらの生態的側面、産業、建築‥、今回の見学会で多様な視点から風景を考えることができたが、同時に自分が貢献できる知識はずっと狭いもので、その限られた範囲でももっと強みにしていかなければならないと実感した。この先もその成長を共有していく仲間となっていきたい、今回の見学会で得たたくさんの出会いを大切な刺激にしていきたい。

□馬場隆行

1) マキノ「海津大崎の景観」

昔は船で栄えていたパブリック性をもっていた浜が、現在では洗濯物や植木鉢などの住民の生活がはみ出してくるセミ・プライベート性を帯びていることにおどろきました。自動車社会の影響がまちの表（昔は浜、今は街道）と裏（昔は街道、今は浜）を反転させているような印象です。また、電車の駅が近い分、まだ過疎化が食い止められているというのも興味深い状態でした。いままでは文明は文化を破壊するとばかり思い込んでいましたが、海津のそれはまれにみる「文化が文明によって支えられている」という側面なのではないでしょうか。そうした意味でも、旅の最初から海津地域でそのような考え方の転換があったことは僕にとっては大きな収穫でしたし、その後のまちなみの見方にも大きな幅をもたせてもらったように思われます。

2) 針江「生水の郷」

地面にパイプを刺せば湧き水が出るというのは何ともおどろきでした。出来ればいつかそのパイプをさす風景もみてみたいものです。個人的には、やはり室内のカバタに魅力を感じました。（室内なら冬もあまり寒くないことだろうし。）まず何より、家の中に水が沸いているということ自体都会では今の都会では考えられないおもしろいことのように思います。京都では地下鉄によって、井戸が枯れてしまったお店もたくさんあるようです。（豆腐屋などは大打撃らしいです。）また、お年よりはカバタ、若い人は現代のキッチンを使うという住み分けも僕としてはいいところなのではないかと思いました。

こうした住み分けというか使い分けが出来ているから、未だにカバタのような文化が残っているのだと考えられます。水という人間の生活に密接でありながら、台所というわりとソフトな性格がこうした結果をうんでいるのではないでしょうか。そして、それ以上にやはり「鯉との共生」、それも室内というのが興味深かったです。

ペット的であり家族的でもある不思議な存在の生き物が残飯の掃除など、生活の循環サイクルの中に入ってきているということに大きな意味を感じます。環境問題が叫ばれる昨今では、大変重要なライフスタイルの事例であると思われます。

3) 近江八幡　新町通り「町屋の修景」

すべてをそのまま残すということはある意味で大きな矛盾をはらんでいるように思われます。そうした意味では、新町通りの町屋を全部をそのまま保存するのではなく、一部を観光客などにも公開するという方法はよくある方法なのかもしれませんが有効だと感じました。また、京都の町屋の屋根が少したわんだ女性的なやさしい印象なのに比べて、滋賀県の町屋の屋根はビシッと緊張感のある男らしい印象を受けました。これはなぜなのかかなり気になるところです。

4) 近江八幡　「八幡掘り」

川の幅と建物の高さ、桜の枝ぶりがとても心地よいところでした。絵を書いている人などもいて、人と風景が大変いい関係にあるように感じられました。しかし、一つ残念なのはあの交通量の多い車です。やはり、車は伝建築の遠くに止めて、そこからバスに乗るか、またゆっくりまちの中を歩いてくるという方法が有効なのではないかと思います。ドイツなどではずっと以前から「ストップ　アンドライド」という名前で実際にその手法がとられているまちがあり、成功しているようです。

5) 近江八幡　水郷めぐり「ヨシ地の景色」

水といえばやっぱり船。この旅行の中でもっとも気持ちのいい時間でした。船の上で横になっているとすぐに眠ってしまいました。とはいえ、風景としてはゴミやエンジン付きの船など、現代の文明がせっかくの雰囲気を台無しにしている部分も多々みうけけられて残念でした。基本的にはマナーの問題だと思うので、何か規制や罰則を作るほかに解決法はないものかと思います。

□前田翔三

・高島市　マキノ「海津大崎の景観」

石垣の上に民家が建ち、その間を幾本もの細い路地が湖に向かって伸びていく。文化的景観という現段階においてはまだ曖昧模糊とした概念が何となくピンときた風景でした。それと同時に以前に営まれていたであろう生活や生業が影を薄くし、その残照のようなものがかろうじて浮かんでくるような、儚さというかある種のギリギリさも感じました。あの石垣は確かに人間の文化と生活の確かな足跡ではあるけれども、生活や生業との関係性が切れて遺構と化したときにどのように再定義するべきか、そうした問題を既に抱え始めているのではないかと感じました。建物が更新されてゆき、石垣と上モノの関係性が今のものと異なるようなものになってもその文化的景観としての正当性を保てるのか、あるいは建物を建て替える必要が生じた場合にはどのように更新すれば良いのか、そうした問題に対する答えはいずれ必要になるのではないかと思いました。「あー日本だー」となぜか思った風景でした。

・高島市　針江「生水の郷」

マキノの石垣とは異なり、針江に関しては“この水が湧き続ける限り、なんらかの価値、あるいはオーセンティシティーは保持され続けるであろう”という印象を持ちました。それは“タダで湧き続けるありがたいお水”という文化的な概念とは離れたところにある、俗物的な価値をもあの生水は保持しているからです。そしてまた、集落の中心を流れる川が集落のアメニティ向上に果たしている役割が非常に大きいからです。それを再び損ねるようなことを針江の人たちがするとは考えにくいと思います。

ただし、川端の文化や、焼杉の独自なテクスチャーをもつ民家などはあるいは損なわれるやも知れません。現に若い人たちはもう川端を使わなくなっていると聞きます。今のお年寄りの世代が亡くなっていったときに、部分的に川端文化を守ろうという動きはあっても大勢としては使われなくなっていくのではないかと思います。自分の生活と直結していないものを守ることは大変労力のいることだろうと思います。文化というものは冷凍保存できるものではないし、するべきものでもないのではないかと思うので、生水の文化を守るならばそれは動的ななにかを必要とするのだろうと思います。今後動的に生水の新たな利用法などを若い世代の方が見出していったならばそれは新たな文化的景観となりうるのではないかと思ったりもします。動的保存、これは非常に今後重要かつ難しい問題になっていくことだと思います。

蛇足ですが、針江地区から少し離れたところには別荘地のようなログハウスや輸入住宅の建ち並ぶ地区があったように思います。地元の方がどのように感じていらっしゃるか分かりませんが、風景を守るということは容易ではないということをいつも感じます。なにが正しいことなのか分からなくなることもしばしばですね。

・近江八幡　水郷めぐり「ヨシ地の景色」

それにしても今回の見学会においては、文化的景観というものについて考えることが多かったように思います（それだけ素晴らしいものが琵琶湖の周りには数多く残っているということだと思います☺）ヨシが生業と離れた中で、あの風景を文化的景観と呼ぶことに対する抵抗感は確かに生じるだろうと思います。文化的景観という概念を“時間”の中でどのように捉えるべきか、非常に大きな問題だと思います。農業のほうでもデカップリングという概念が導入され、厳密には生業と風景がマッチしなくなっているということも聞きます。個人的には産業形態の変化ということと、風景の変化というものはタイムスパンがかなり異なるので、そのタイムラグが生じている間は生業と離れていても、その風景には価値があり守るべきだと考えますが長期的に見たらいずれ考えなければならない問題だと思います。（観光も生業じゃないか！ということを言っていた友人もいました）

・近江八幡

近江八幡市のまちづくりの経緯や、近江商人の残した雄大な（京町屋に比べたら相当雄大だと思います）町家群や伝建地区、そして浜崎先生の素晴らしい解説が印象に残っている近江八幡ですが、一番問題意識に響いてきたのは奈良さんのおっしゃった“市長が替わって 100 が 0 になった”ということに関してです。景観政策において、地方自治体の首長の果たす役割は本当に大きいと思いますが、近江八幡市のように文化政策、景観政策の重要性が容易に理解されそうな地区においても奈良さんのおっしゃったようなことが起きているというのは少なからずショッキングなことでした。直接選挙によって選ばれる首長さえその気になればかなりのことが自治体でも出来るということが明らかになった川端行政（全国的にも注目された）の直後にそういった後退が起きるということがピンと来ませんでした。いろいろと背景はあるのでしょうが、せめて都市政策が選挙の論点にくらいなってほしいと思うところです。これは日本全体に対して思うことですが、日本の政治家は本当に文化行政であるとか、都市景観の重要性といったことにたいする認識が欠如しているのではないかと感じます。それは裏返せば選挙民である市民の問題でもあります。市井における議論が盛り上がるためにはなにをすべきか、我々にはそういった問いに応えることも求められているのかなと思います。

・　雑感

上記では問題意識ばかり書いたので、ちょっとつんつんした感じになってしまいましたが、それにしても楽しい見学会でした。文化的景観とはなにか、行政のあり方とは、集落の未来はどうなっていってしまうのか、など頭の片隅で考えたり議論しつつもとりあえずは素晴らしい風景や建物にたくさん出会ったり、皆とはしゃいだり、とても楽しい二日間でした。今までの見学会ではスポット的なエリアや建物を見ることが多かったように思いますが今回は面的にいろいろなものを見れて、より広い物事の捉え方をできるような優れたプログラムだったと思います。資料の内容も素晴らしく、また石川先生、浜崎先生、奈良さんといった素晴らしいゲストの先生方にもきていただき僕にとって非常に刺激的かつ有意義な見学会になりました。

■講師の方からの感想

□濱崎一志教授
皆さん非常に熱心にやっておられました。非常に解説のしがいがありました。

まず１つ。様々な質問の中で「重要文化的景観をこれからどうするのか。残さなければいけないのか。」という非常に率直な質問が印象に残っています。我々は、残す事を前提に考えていましたし、まったく意義のないものだとは思っていなかったので、改めてそういった質問を出してもらったのはよかったです。近江八幡市で重要伝統的建造物群保存地区等の色んな保存活動をやってきていて、周辺が守りきれない、色んな守りきれないものが一杯あります。いくつかのよく残っている所を、いかに今の生活とマッチさせながら残していくかという事を考えている所だったので、やっぱり非常に新鮮に聞こえました。

集落なり都市なりに対して意識の高い方々からその様な質問が出てきて、文化的景観の保存というものが立ち上がってまだ２・３年、改めて自分達が今からやろうとしている事を、どうやって分かりやすく理解してもらうかという事を、考えさせられました。まったく何も考えずに外から重要文化的景観として円山村等を訪れた人々にどう説明するか、おそらく訪問者には「なんのこっちゃ分からないだろう」と思います。例えば岩手県の本寺村にしてもそうだと思います。ただの農村景観が重要文化的景観の対象となっているんですが、それが文化財といわれた時に、ここに税金がつぎ込まれ保存されている事について、一般の人達がどう反応するかを考えていかなきゃいけない。

そういった意味で、重要文化的景観をこれからどうするか頭の痛い所でもあります。

次に。「重要文化的景観の前提である、人々の営みがつくった景観をどう守るか」という話しなんですが、営みが変わっていく、常に生業が変化している、そこをどう残すかという次の課題を抱えています。

難しい問題ではありますが、この課題に対して絶望的になっている訳ではありません。それを次の世代に繋ぐためにどうしていくかというのも１つの知恵ですし、それをやっぱり継いで置かないと人々の営みがつくってきた景観がすべてなくなってしまう。あのままほって置けばあの一体が圃場整備されて、非常に機械化された農場におそらくなっていくのですけれども、そうすると、それまで人々が自然と織りなしてきた生活の形態や生活の知恵というものがそこで全部なくなってしまう

そんな意味で日本の伝統文化の中にそういったものがあったと示せるような‥例えば人の遺伝子には、様々な状況や環境の変化に対応するために、一生使わない余分な遺伝子が数多くありますよね、でもこれはとても大切な遺伝子です。そんな全体から見れば、一見非常に余分に見える部分かも知れないのですけれど冗長性を持った一環として、重要文化的景観を残していきたいと考えています。

□奈良俊哉氏
近江八幡市の景観業務に関わるにあたり、日々、外からの目を失わないように気をつけている。長く住み続けると、どうしても感覚が曖昧になってしまう。街の景観をつくっていく上で客観的な視点は欠かせない。

それぞれの専門分野へ向けてメッセージ
・伝建について
デザインは、地域文化のデザインをいかに取り込み、現在の建物に組み込んでいくかが最も重要です。「伝建がなぜ今も残っているのか。」

伝建は、地域の特性と歴史を凝縮したデザインです。耐久年数を超えても住民に価値として認識され温存されるものであることが大切であり、これから建てる建物や改築するものに気を配る必要があります。ここの場所は近江八幡市にとって特別な場所。新町通りがあり、郷土資料館（西村太郎右衛門の宅地跡）、旧伴家住宅、旧西川住宅がある場所で景観として大切な場所です。そんな場所に異なる様式の建物があることは景観上良くありません。（旧伴家住宅斜め向かい、新町通りを出た角地にある3階建てのRCの家屋を指して。）理解されずに建てられると、この地域のデザインではないものになってしまいます。場所としても建物としても良くないものなのでどうにかしたいと考えています。また、建物をつくる際、古いもの、古そうなデザインをつくれば良いわけではありません。JR安土駅近くの商家は大壁にうだつのあるデザインがあります。これは、この地域のデザインではありません。地域のデザインが理解されずに思い込みによってつくられたデザインです。理解の上で新しい様式をどう建てるか。地域の特性や文化、歴史に対する理解が大切です。景観上の合致や不一致を考えてつくることもまた大切です。

・都市計画について
都市計画では、部分ではなく全体（全域）を見て欲しい。インフラをどう整備していくかが大切です。また、なぜ必要なのかという問いにも考えてつくって欲しいと考えています。歴史的必然性を考えて欲しい。地図に線を引いて便宜上決めた直線の道路をつくるよりも曲がっていても良いから伝承などの歴史性や山や湖といった自然との景観に配慮した良い道を作って欲しいです。

雑談
・ヨシ地の風景について
ヨシの風景に流れる時間がよい。手漕ぎのボートの速度とそこに流れる時間は似ているから心地よい。モーターの観光船は波が強すぎる。水郷に流れる時間を十分に楽しめないどころか、強い波によってヨシ地がけずられてしまう。ヨシ地は土で出来ている島のようなもの。昔は生きている木で土手を守っていたが補助整備のため多くを除去してしまった。現在でもいくつかは残っている。ヨシ地に植生していたミズヤナギは水中から生えているのではなく、湖の底（地面）から生えている。また、成長が早いので土手を守るには適している。

偽木の橋は、その道を行き来する地元の田畑を管理している人たちによって使われている。作業のためトラクターなどで渡る。ヨシ地の景観を守るため意識して偽木にしている。橋は使用者個々人での出資になるため整備が難しい。市でも行っていけると良い。

□石川慎治助教

案内させて頂いた場所が、「一個一個の建物が例えば非常にデザインがいいというような建物の集まり」、そういう集落ではないので、一生懸命デザインをやっている人達に分かってもらえるかなという不安は正直ありました。滋賀県の風土の中からでてきた、どちらかというと建築のレベルとしてはそれほど高くない、けれどもセグメント的に形が残ってきた場所です。でもみんな興味を持って聞いていてくれた。海津にしろ、針江にしろ、今後まちづくりをやっていく上で、可能性としては若い人に対してあるのかなと感じました。

海津は重要文化的景観という文化庁の保護は頂いているんですけども、これからどういう風にまちを整理していくんだとか、過疎化の進むまちにそれこそソフトとして、みんなで村の糧となるどんな計画を作っていけばよいのか、考えていかなければならない。

可能性としては、東京や大阪に出て、いまさら地元に帰れないという団塊の世代が、大阪や京都に出るのに便利、でも自然は残っている場所、という事で第２の住処として住んで頂く、そうやって都市と繋げながら、住み続けてくれる人を引っ張ってこれればいいかなと。

｀これから｀なんですよ。
皆さんの反応を見る限り、まちづくりの未来は明るいのかなという思いは持ちました。

針江はそういった意味ですごく元気。どうしてああなっているのか僕もちょっと分からない。あそこは高島市市長のお膝元なんですよ。今も住んでいて。だから昔から地域の繋がりは高島市の中では強い場所なんです。水のまちですから、繊維業などの企業もいるみたいなんですよ。それで元々上手くまわってきているんですね。そういう基盤があって、NHK の放送があって、今すごく注目を集めている。そして閉鎖的なやり方で観光地化に成功しかけている不思議な場所です。ただ、若い人はやはり少ないですね。若い人に繋がっていけば１つのモデルとしてはとてもよい。

針江は今年調査をして、来年度それを受けてどういう風に保存していこうかという計画を、行政の方で考えていく事になっています。それをセットにして文化庁に申請する。お話しとしてはでていますが、まだ重要文化的景観に申請するか分かりません。

分かっていませんが、もし重要文化的景観に選定されてしまうと、色々とがんじ絡めになる、そういった意味でどうしていこうかと今迷っている所です。できるだけ自由な形で（選定されてしまうと修理等をする時に逐一報告しなければいけませんから）、地元の人が手を入れていける形で守っていければいいなと思いますね。

■企画者の感想

□永山悟

琵琶湖、最高だ。今回の見学会では主に海津、針江、近江八幡の3地区を巡ったが、それぞれが固有の文化的景観を持つ場所であった。GSデザインユースとしてスポットではなくエリアを、特に文化的景観地区を見学するというのは初めてだったが、予想以上にすばらしい町並み・文化に僕は感激し、また他の人もそうだったに違いない。

しかし同時に、悶々とした悩みを抱くことになってしまった。まず文化的景観地区の住民をどう扱うか。海津は過疎化が進み、集落の存続問題を含めて石垣の維持が困難になってきている。針江は上水道の利用率が増え、カバタ（家庭用湧水）の文化が衰えてきている。近江八幡は観光地化によって、住環境が悪化している。文化的景観と住民の住環境のバランスはどうとるべきなのか。
むむむ。

また、文化的景観を持たない地区は今後どうしていくのか。文化的景観のパイオニアである近江八幡でさえ、特定の地区以外は普通の地方都市。その「普通」の方もどうにかしないといけないはずなのに、どこか文化的景観に頼っているようだから、それではまち全体は良くならないし、市民の理解も得られない。

これらの課題はまあ追々考えていくとして、今回の見学会を通じてGSDyの活動としての見学会の意義が改めて見えてきた。

・土地に詳しい方に案内してもらえる。
・普通行けないような場所にも行ける。
・他の参加者とその場で議論できる。
・大勢は楽しいということで、

今後の見学会にも是非皆さんに参加してもらいたいものだ。

最後に、今回は自動車移動ばかりだったが、事故がなくて本当に良かった。滋賀県立大の濱崎先生、石川先生、近江八幡市の奈良さん、そして針江の案内ボランティアの方にはお忙しい中のご協力感謝申し上げます。

□灘本知香

滋賀県という地域の雰囲気をなんとなくでも構わないから、ぷつぷつと途切れ途切れではなく一連の流れとして掴んでもらえないか。と思いながら企画を進めていきました。びわこ沿いに見学地をしぼって、さらに各々の見学地の場所を認識しやすいように、湖を１周するという単純な経路としました。

１日目、小雨の降る中はじまった琵琶湖めぐりめぐる見学会。見学地をきちんと見る事ができるだろうかと心配していましたが、初日メインの高島市見学会の前に雨は止み、石川助教の車の先導の助けもあり、無事に終える事ができました。

高島市のある湖北はつんと空気が澄んでいて、とても美しい場所でした。かつて漁村であった海津大崎の石積みの残る風景が緩い弧を描いて広がっていました。少し説明を聞けば、ずっと続く石積みが、かつてどのように漁業を生業として生活をしていたかを教えてくれるようになります。石積みの高さから。組み方から。その隙間の小道の成り立ちから。湖岸の波打ち際に延々続く石垣の風景は、文化的景観を理解する上で、とても分かりやすい風景だったように思います。さらにこの場所は、自然を維持管理する有様と生業との関わりを強く感じさせる場所でした。舟運が衰退するまで滋賀県では、県境にぐるりと在る山岳からマキをとり、内陸を経由して、湖岸へ運び、それをびわこの舟運を利用して長距離を輸送するという事が成されていたそうです。そうやって山岳地域と内陸地域と湖辺地域は繋がっていました。そんな関係が成り立っていた時代は、山も水辺も管理が行き届いていました。現在の海津大崎は過疎化が進み、漁業は衰退しています。

民家の内外に湧水を引き込み生活用水として使う、針江の‘川端’を見学しながら学生の頃に読んだ著書の－水界－という言葉を思い出していました。その言葉と共に、－生活に接した水（自然）だけがその人の景色となる－という事が書かれていました。水と入り組んで渾然一体となって生活をする‘川端’のシステムを持つ針江は、まさしく水界を持つ場所だと思います。ここに住んでいる人達は、目の前にある只々漠然とした水風景ではなく、生活に即した何がしかの感慨の在る力強い水風景を見ているのだろうなと思いました。

２日目、晴れ。絶好の見学会日和となりました。嬉しい！晴天の空のもと近江八幡市の重要文化的景観・重要伝統的建造物群保存地区をしっかりと見る事ができたんじゃないでしょうか。現地の説明をして下さった濱崎教授・奈良氏の解説は、これらの見学を充実したものにして下さいました。

ヨシ地の風景とともに、保存活動をされている建物の成り立ちや構成をじっくりと知る事ができました。水郷めぐりには絶好の日和。のんびりとしたヨシ地の景色にうたた寝をする人もいたようです。

重要文化的景観について、印象に残るのが濱崎教授の冗長性の話しです。どうして残すのかという問いに対して、経済発展や都市開発のために優位な場所だけでなく、文化的に優位な場所があった方がいいでしょうという事を、人の遺伝子を喩えに話して下さいました。「様々な状況の変化に対応するために、人には余分な遺伝子が多く存在する。冗長性があった方がいい。人の遺伝子の有り様と同じ様に、生きていくために色んな場所があった方がいいんだよ。」と言う事でした。

勉強会で水圏の研究をされている高野さんと同じグループでしたが、彼女は生態系の保存の側面から、文化的景観についての意義を語っていました。濱崎教授の冗長性の概念的な話しと共に、今私が生活をしている範囲の内だけで考えるのでは、文化的景観の意義は見えてこないのかもしれないと考えさせられました。

重要伝統的建造物群保存地区は日本で数える程しかありません。近江八幡市のその地区内の建物は、庇や屋根は比較的薄くむくりもなく、重厚・無骨ではなくて、上品・繊細といった印象でした。私はとても女性的な表情の街並だと感じています。旧伴家住宅では、増築した建物をいかに既設の重伝建の建物に馴染ませるかという工夫を見る事ができました。古材をかき集めて、それを躯体と使って増築された建物でした。その天井裏にあがらせてもらいましたが、童心に帰るような空間。屋根組の中に入るなんてめったにない体験です。きれいにお化粧されていない裏方を見るのは楽しかったです。

参加者の皆さんが各々の見学地で真剣に講師の方の話しを聞き、見学して下さって嬉しかったです。準備をしてよかったなと思いながら旅をしていました。参加者の皆さん、本当にありがとうございました。見学地の企画にばかり気が取られていましたが、参加者間の交流についても、もう少し配慮すればよかったですね。

最期になりますが、自分が住む滋賀県の見学会を、同県に暮らす江渡香莉さんと企画する事はとても有意義でした。そして裏方にまわり運営の経験をする事も。さらに企画を進める過程で、各講師の方から充実した多くの知識を得る事ができました。江渡さん、そして講師の濱崎一志教授、奈良俊哉氏、石川慎治助教、心から感謝致します。

□江渡香莉

感想の前に。

ＧＳＤＷに参加してからあっという間に月日が流れてきたように感じています。年末に滋賀県を見学会にどうかというお話を聞いてから灘本さんへお伝えし、企画を立ち上げ運営していくまで色々考えることが本当に多かった見学会でした。それは、発案・企画をして運営することだけでなく１つ１つのことに考えさせられる機会でした。今までＧＳＤｙで参加させてもらってきた活動の裏側が少し見られた気がします。ＧＳＤｙが沢山の１人１人熱意がある人によって動かされていることを色々な角度から実感しました。「こんなにも熱い団体に会えてよかった。」と思いました。
一言では言い表せませんが、ＧＳＤｙメンバーの皆様、本当にありがとうございました。

各見学地へ。

高島市マキノでお聞きした辻のお話。人の生活道が今も名残として残っている。残っていることはとても面白いと思いました。しかし、今、アスファルトで区画整備が行われ、人のつくる獣道はかつてのように作ることが出来なくなってきているように思えます。これから獣道をつくるとしたらどうやって作ったらいいんだろう。・・・それにもしかすると、地図を広げて探してみたら今つくられている獣道があるかもしれない！探してみたいと思いました。
針江では、とにかく水が綺麗。こんなに透き通った川を見たことがない。水と鯉と暮らす生活は、誰からとも学ぶことなく、生きているものへの愛着や生きることを知り、学べる場所だなと思いました。本物に触れながら時間をかけて学べる自然への愛情そのものが、この土地を作っているように思いました。近江八幡市は、学部の頃から親しみのある場所でしたが見学会や前後を通して、沢山の視点で見ることが出来ました。特に、新町通りの町屋の雰囲気がとても好きです。

企画を立ち上げたときから。

天気予報は雨だったり、少し不安を持ちながら当日を迎えていました。ただ、雨の風景にも関わらず、今も昔も変わらない街の風景を見学地として周ることができたので良かったです。建築ツアーではないものの、集落調査のような形になってしまったので見学会として少し大丈夫かなとも思っていたのですが、滋賀県の景観の概要を見てもらえたのでそういう形で景観を見ることも出来るのかなと思いました。どこの町も、実際に見てその土地や住む方から学ぶものが本当に多い場所。企画中も見学会中も滋賀の街は住んでいる人によって温存されてきた街だという印象受けていました。今の暮らしの状態に目を向けなければいけない現状は確かにそうかもしれませんが、何よりも人によって作られる町を住民が世代を超えて意識しているかいないかにヒントがあるような気がしました。近江八幡市の八幡掘に沿って見学会の後、歩きました。堀の両側にある歩道がなくなる先には、今の掘の両側の使われ方が眼下に広がっていました。新町通の景色とは異なり、今の暮らしがそのまま景色になっている場所。堀の両側に畑があったり、一面花が植えられていたり。景色は修景を行っている別の場所でも作られているようにも思いました。未来へ街の遺伝子を「残す」ことが可能な地域というだけで驚いていたのですが、その上で、「どのように残すか」がどんな時も問われるものだと実感しました。

最後に、滋賀県立大学の濱崎教授、石川助教、近江八幡市の奈良様、本当にありがとうございました。

高島市マキノ町海津

▲集落と琵琶湖湖岸の風景

▲海津集落の石積み

▲海津集落の石積みの上の民家

▲講師石川助教からの説明

▲水仕事をする為のハシイタ

▲講師石川助教からの説明

▲住民によってつくられた生活道

▲海津集落のまち

高島市新旭町針江

▲針江大川支流にて
針江生水の郷委員会の方からの説明

▲針江大川にて

▲梅花藻

▲民家にて川端の見学

▲川端と鯉

▲民家での見学

▲中島自然地にて
地域住民の方からお話を伺う

▲中島自然地風景

近江八幡市

▲円山水郷巡り／ヨシ地の風景

▲円山水郷巡り／ヨシ地と土手

▲円山水郷めぐり／西の湖

▲八幡掘

▲兵四楼邸にて
講師濱崎教授からお話を伺う

▲旧伴家住宅にて
講師奈良氏からお話を伺う

▲旧伴家住宅にて

▲新町通りにて

3. 企画運営

■企画運営行程（2008 年 2 月～2008 年 8 月）

2 月	週 1 度、電話でミーティングを行い、見学会企画の素案をつくる。 （コンセプトを記した企画書の作成）
3 月	3 月 1 日の GSDy 定例会に企画書を提出。（→受理） 素案を元に旅程を詰める。
4 月	見学会講師の依頼。 見学地・宿の予約。 GSDy 総会にて見学会企画の告知。 レンタカーの手配。
5 月	GSDy HP・メーリングリストにて見学会の告知。 見学地の資料収集・パンフレット作成。 見学会に用いる用具の準備。 見学者に配るパンフレット・資料の印刷および郵送。 ドライバーに配る資料の準備。
5 月 3 1 日～6 月 1 日	見学会当日
6 月	参加者から感想・アンケートを回収する。 講師の方に謝礼をお渡しする。 会計をまとめる。 報告書およびHP用報告を作成する。
7 月	GSDy HP に報告書のアップ。
8 月	各講師の方へ報告書をお渡しする。

■会計最終報告

収入		金額／人	金額
（１）見学会会費	16人参加	¥ 17,000	¥272,000
（２）非会員見学会会費		¥ 0	¥ 0
（３）GSDy 援助金			¥115,000
収入合計			¥387,000

支出		金額／人	金額
（１）交通費			
レンタカー代金	13020円（内免責補償2100円）×４台	¥ 3,255	¥ 52,080
ガソリン代金		¥ 673	¥ 1,0766
有料道路使用料	北陸自動車道＋琵琶湖大橋	¥ 260	¥ 4,150
Ａ車	500+200		700
Ｂ車	750+200		950
Ｃ車	1350+200		1550
Ｄ車	750+200		950
（２）施設等見学費			
かばた　案内料	高島市見学	¥ 1,000	¥ 16,000
水郷めぐり　乗船料	近江八幡市見学	¥ 1,500	¥ 24,000
重伝建地区施設　入場料	近江八幡市見学	¥ 400	¥ 6,400
（３）１日目昼食費		¥ 845	¥ 13,520
（４）宿泊費※1		¥ 7,250	¥ 116,000
（５）懇親会費		¥ 1,223	¥ 19,564
（６）事前準備費			
文化的景観資料　印刷費		¥ 1,413	¥ 22,600
パンフレット　印刷費		¥ 282	¥ 4,513
資料　郵送費		¥ 124	¥ 1,990
勉強会　準備費	模造紙・マジック	¥ 39	¥ 630
滋賀県地図	４冊	¥ 210	¥ 3,360
（７）謝礼金※2			
近江八幡市　奈良氏			¥ 30,000
滋賀県立大学　濱崎教授			¥ 30,000
滋賀県立大学　石川助教			¥ 30,000
支出合計			¥ 385,573

残金※3	¥ 1,427

※１　（４）宿泊費には勉強会用の広間使用料、１日目夕食費、２日目朝食費・昼食費が含まれます。

※２　（７）謝礼金のうち¥20,000は見学会会費から支払いました。

※３　残金は報告書作成実費にあてます。

4. 集合写真

Date :05/31

Date: 06/01